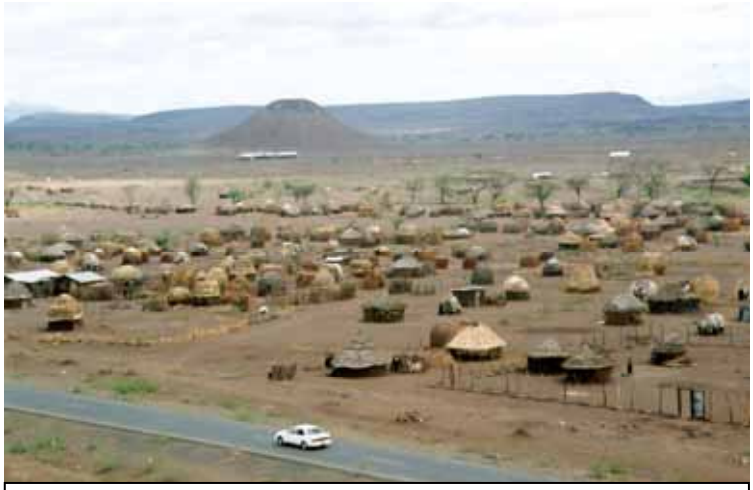
カクマ難民キャンプ訪問記（難民キャンプでの大学教育）

下川雅嗣

本稿では、今回のカクマ難民キャンプ訪問に関して、私の全体的印象を簡単に述べたあとに、私が印象に残ったことの一つであるカクマキャンプでの大学教育についてのみ若干詳しく紹介したいと思う。



カクマ難民キャンプの様子（比較的新しい居住区）

難民キャンプと言ってもイメージのわかない人もいるだろうから、簡単に紹介しておく。カクマ難民キャンプは、1992 年に設立された。ケニアの首都ナイロビから北西約 900Km、スーダン国境にあるロキチョキオより南に約 80Km、スーダンとの国境からは約 135Km に位置する。同キャンプの広さは南北約 13Km, 東西約 1Km である。現在、同キャンプに滞在している難民は約 9 万人で、スーダン難民が最も多く約 75000 人、その他ブルンジ、コンゴ民主共和国、エチオピア、ソマリア、ウガンダ及びルワンダ出身の難民が滞在している。

私たちは、ナイロビからロキチョキオまで飛行機で飛び、ロキチョキオからは車で約 2 時間でカクマだった。ロキチョキオからカクマまでは、私たちの車とＵＮ（国連）の車の 2 台で移動したのだが、それには警察のエスコートつきだった。警察のエスコートがないと、襲撃されると言う。ナイロビは 20 度前後で過ごしやすいのだが、カクマは異様に暑くて大変な場所だった。日中は 40 度まで気温があがり、木陰に吹き込む風が熱く感じた。夜も 36 度くらいで寝苦しい。なお、私たちの泊まったところはカクマキャンプ内ではなく、隣接するＮＧＯやＵＮの宿営地である（カクマキャンプ内は危険ということで、ＵＮやＮＧＯスタッフは夜 6 時以降は立ち入り禁止）。そこには簡易宿舎が建てられており、そこでさえ生活環境はかなり厳しいので、キャンプ内のテントや掘っ立て小屋での生活はどれほど厳しいのだろうか。私は行った翌日の

難民の子供たち

日中に日射病のようになり夕方から嘔吐を繰り返し、夜通しうなっていた（なお、私はスラムの水等を飲んでもお腹はいつも大丈夫なのだが、体温調節はあまり得意でなくよく日射病のようになる。ただこれはいつものことで夜寝れば基本的に大丈夫)。また、カクマキャンプに来ている人々は、ほとんどが壮絶な歴史を有しており、その中ではトラウマからのリハビリテーションなどが非常に重要な仕事となっている。そして、上述したような多様な文化背景を有した人々、さらには同じ村で殺しあった人々の両方がキャンプに居ることもあり、そこでの生活の厳しさは行って見なければわからない。と同時に、キャンプ内では、平和教育（Peace Education）の試みも様々に行われており、トラウマからのリハビリテーションと同時に行われる平和教育は、将来のアフリカ、そしてアフリカのみならず、全世界の平和構築のための先駆的な場であり、新たな光を放っている場とも言えよう。もう一つ強く印象に残ったことは、今回の訪問は JRS(Jesuit Refugee Service)という団体を通して実現したものであるが、この JRS のカクマキャンプでのチームとしての働き方に大きな魅力を感じた。彼らは、JRS のカクマでのスタッフは、外部スタッフは 12 名（そのうち国際スタッフ（ケニア人以外）が 2 名、ケニア人が 10 名、これにカクマキャンプにいる難民自身のスタッフが約 300 人程度である。12 名の外部スタッフはカクマキャンプに隣接するＮＧＯコンパウンドの中の宿舎に住み共同生活をやっている。元々JRS はカトリック・イエズス会が設立母体であるが、ここでのスタッフは、カトリックの信者は 2 人にすぎず、聖公会やプロテスタントの信者、及び信者ではない人たちで構成されている。また男性が 9 名、女性が 3 名である。しかしながら、JRS の基本的なビジョン（①難民とともにいること(accompany)、②難民に仕えること（serve)、③難民に関する様々な問題を社会化し、変革を促すこと（advocate)）が共有され、見事な協力関係の中で互いを支えながら仕事が行われている。環境的に非常に厳しいところでの厳しい仕事なので、協力しない限りスタッフ自身が生き残れないということもあるだろうが、同じビジョンを共有し、命をかけて同じ問題に取り組む、一緒に住む共同体に対して、大きな魅力と“うらやましさ”を感じた。ナイロビに居る JRS の採用担当者が、「ここで必要とされる最大の能力は、協力の中で働ける人である。最近目立つようになってきている競争的に働く人はいらない」という一言がこのように実現しているのだと思った。もう一点は、外部スタッフの最大の役割は、「難民自身の専門的スタッフを育てること」と位置づけられており、最終的には難民自身で難民たちへのサービスが出来るように

宿舎でくつろぐＪＲＳのスタッフたち

なることが目指されている点も特記できる。

ケニアにいる難民の状況、カクマキャンプの状況及びそこでの支援活動等の詳細な報告はこれまでの章を見ていただくこととして、ここではカクマキャンプでの大学教育についてのみ紹介する。なんと遠隔学習(Distance Learning)と言って、南アフリカ大学の学位がカクマキャンプの中で手に入るのである。この遠距離学習についての紹介と、そこでの学生とディスカッションの時間を持ったのだが、その際に、上智大学の学生や上智大学のことに思いを馳せ、思い浮かんだことを分かち合ってみたいのである。

カクマキャンプ内で、将来母国に戻ったときに、新しい国家、社会建設を担う若者のための大学教育が行われている。これは、カクマキャンプ内でプライマリ・スクール、セカンダリー・スクールまではあるのだが大学はなく、難民たちが「国連には国連大学があるのだから、私たちも大学教育を受けたい」と国連（ＵＮＨＣＲ）に要望を出した結果、国連はそれに応えようとしなかったが、代わりに JRS（Jesuit Refugee Service）が仲介し、南アフリカ大学（Public University of South Africa；UNISA）の協力により、1998 年に実現した。その結果、カクマキャンプにいながら、単位と学位がとれるのである。社会科学系の学科は、学生の希望によってほぼすべて履修できる。当然のことながら、入学試験（だいたい受験生が 300 名くらいで毎年の合格者は 10 名程度）もある。合格したものは、毎学期、履修科目の教材が送られてきて、それを基本的には自習し、学期末試験に、実際に南アフリカ大学で行われている同じ試験を受けて、それをパスすれば単位がもらえるという仕組みである。私たちは、そのほぼ全員とディスカッションの時間を持ったが、学生は約 30 名、エチオピアからの難民が一番多く（エチオピアでは、大学生が政権の批判を強くやったので、現政府にとっては彼らが、最初の殺戮の対象にされていたため、元々大学生であった人が多数逃げ、カクマキャンプにいる）、次に多いのがスーダン、そしてルワンダ、ソマリア、ブルンジの難民もいた（なお 30 名のうち女性は 3 人）。私が訪問したときはもう昼の暑い時間で、それにもかかわらず、熱風のふく木陰（教室ではない）で、上半身裸で、各自が自習をしていた。とにかく、この嘔吐しそうな厳しい状況の中で、しかも教員もいないのに、皆真剣に自習をしている状況は感服に値するもので、上智大学の学生にもその光景を見て、今自分たちの置かれている状況と比べて欲しいと思う次第である。

カクマキャンプ内のＵＮＩＳＡの学生たち

彼らとのディスカッションの中で、彼らがなぜ、そして何をこの大学で勉強しているのかを聞いた。彼らの所属している学科としては、コミュニティー開発学科、社会学科、公

共政策科が多かった。そして、彼らがここで勉強している動機は、ほとんどが、「将来国に戻ったときに、新しい社会をつくる必要がある。そのためには、専門的な知識や国際関係、経済構造等を理解していないと自分たちの国を発展させていくことができない」と言ったものであった。彼らの中には、自分だけが知識や知恵を吸収することによって、豊かな生活をするとか、成功するといった動機というよりも、将来の自分たちの社会の発展というものを夢みて、そのために貢献したいと真剣に望んでいる様子が伝わってきた。このディスカッションをしながら、私は自分が教えている大学の学生たちは、何のために勉強しているのだろうか、その真の動機はなんだろうかと思い巡らしていた。ディスカッションの中で、日本の過去の教育の話、そして今の現状、また難民キャンプ内での教育の目的等を話し合ったのだが、だんだんと明らかになってきたのは、教育・知識を取得することは重要であるが、その教育・知識を何のために使うのかが、さらにもっと重要であるということである。彼らは、受けた教育を将来の社会づくりのため、また他者のために使うとまっすぐに考えていた。また日本においても、明治時代において大学教育を受けていた人の多くは、新たな社会づくりのために、受けた教育を使っていたような人が多かったように思う。しかしながら、今の大学生はどうであろうか。日本の社会は、多くの人々が、教育の分野に限らず社会全体において個人主義的になり、自分が社会で生き延びること、社会の中でのステータスを獲得することが中心的な価値観になりつつあるように思う。また、大学自体も、その大学が生き延びること、社会の中でのステータスを獲得することが中心的な課題となり、文部科学省の大学教育への考え方も、日本社会の国際競争力を向上させること、すなわち、日本が生き延びること、国際社会の中でのステータスを獲得することが中心的な課題になっているのではないだろうか。このような大きな流れの中で、カクマキャンプ内の大学生との話は、教育の原点に私たちを再び戻してくれるような気がする[1]。

現在、日本の文部科学省は「特色ある大学教育支援プログラム」「魅力ある大学院教育

---

[1] 私が専門としている経済学（特に新古典派経済学）においては各個人（経済主体）が、個別に個人のためによく生きることが結局、市場メカニズムを通して社会をよくする（効率的にする）と考えられており、またその際の切磋琢磨する競争が重要であると考えられている。本稿で、競争でなく協力をと述べ、また個人主義的な傾向に対して批判をしているが、この経済学の基本原理自体を私は否定するつもりはない。しかしながら、このように市場メカニズムが働くためには、一人ひとりの基本的自由が確保されているという前提条件（物理的にも、また互いがそれぞれの自由や差異（多様な価値）を大切にする社会的雰囲気など）が整っていなければならない。また効率性を極限まで追求することが本当に良い社会なのかという議論も必要であろう。そのような枠組みをつくる作業（特にこれから新たな国づくりをはじめる難民の人々にとってはこれが中心だろう）においては、教育を受ける動機として「自分たちの社会をよりよくする」といったものが重要なのではないかと思う。しかし、日本社会においてもこの側面はもう一度思い起こされる必要があると思う。社会性が欠如した個人の最適行動は社会を歪めるし、また自発的な競争は社会に対してプラスに働くだろうが、強いられた競争をせざる得ない状況は社会を閉塞感で包むように思う。また多様な価値観を受け入れない社会的雰囲気の中での競争は、強いられた競争になりやすく、基本的自由の喪失につながって行くものだと私は考える。

イニシアティブ」などを推奨し、上智大学もそのような外部資金を目指して、各部署でそのような取り組みを模索していると思う。これはどちらかと言うと、前段で述べたような個人、大学、日本が社会において生き延びること、競争力の向上を目指したものなのだろう。しかしながら、一方で、UNISAがカクマキャンプにおいて遠隔学習をやっているような協力を上智大学も行い、その資金として「特色ある大学教育支援プログラム」「魅力ある大学院教育イニシアティブ」などを利用することも可能ではないだろうか[2]。またそんなに大げさなことを考えなくても、例えば私が属しているグローバル・スタディーズ研究科の大学院生たちは、紛争、難民、平和構築、コミュニティー開発等を専門としている人たちも多い。彼ら（または教員も含めて）が夏休みの間だけでも、カクマキャンプのようなところに行き、大学教育を学びながらも直接の講義を受けることのできない大学生に対して、特別講義なりチューターをやるようなこともありえるのではないかと思った次第である。

最後に上智大学の学生に対してであるが、あまり意識されていないようにも思えるが、上智大学の教育理念の中には、上智大学の教育の目的は、「学生がみずからの人格を形成し、社会の建設に貢献する力を身につける」ためであり、また「激動する現代世界に向かって広く窓を開き、人類の希望と苦悩をわかちあい、世界の福祉と創造的進歩に奉仕することを念願する」とある。つまり、自分のキャリアアップのためではなく、よりよい社会建設のための教育なのである。カクマの大学生はこれを実践している。私たちはどうであろうか。上智大学で学ぶものが、そのような動機を持つこと、また上智大学で学んだ学生たちが、将来ここで学んだことを社会をよりよくするために使ってくれることを願うばかりである。

---

[2]過去に上智大学はＵＮＨＣＲから、難民に対する大学教育の協力を依頼されたこともあると聞いている（このときは主にアジアの難民が対象だったらしい）。しかしながら、予算の都合上この話は断念せざるを得なかったと聞いている。